

Title	ジッドとその時代
Author(s)	吉井, 亮雄
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70688
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (吉 井 亮 雄)	
論文題名	ジッドとその時代
論文内容の要旨	
<p>文学の領域にとどまらず宗教・思想・政治について、そして同性愛にかんしてまで、自身が抱えるさまざまな苦悩に端を発した問題提起を続け、しかもしばしば前言訂正をためらうことのなかったアンドレ・ジッドの姿勢は、熱烈な賛同者を獲得すると同時に、多くの論敵・批判者を生んだ。「最重要の同時代人」(アンドレ・ルーヴェール)と彼が評されたのは、そうしたスキャンダラスな受容状況を映してのことであったが、1951年の死去後は、実存主義の席卷も相俟って、早くから「煉獄」に留めおかれ、永らく不遇を託つこととなる。</p> <p>しかしながら本国フランスにおける研究の流れをふり返ってみると、この「同時代人」の死と活動停止こそは本格的な探究をうながす契機となったとも言えよう。それまでの批評言説は、少数の例外をのぞけば、なんらかの規定方針にもとづいてなされた断罪あるいは支持・共感の域を出るものではなかったが、作家の没後は次第に、偏見や党派性を排し純粋に美的な見地に立つ研究の必要性が説かれ始めたからである。その結果、主として小説技法の考察を中心にすえた論文・著作が相次いで発表されることになる。</p> <p>1950年代後半から70年代にかけて特に盛んであったこの研究方向自体は、現在もお豊かな成果を生み続けているが、分析の作業が進むにつれ、ジッドにあっては「生」と「作品」(あえて「テキスト」とは呼ぶまい)が不可分の関係にあるにもかかわらず、その豊饒で多岐にわたる創作活動に対する実証的解明が大きく立ち後れていることが痛感され始める。言うまでもなく、研究者たちが抱いたこの認識は、おりしも隆盛をきわめていた構造主義やヌーヴェル・クリティックが忌避・排撃した伝統的実証主義への郷愁によるものではない。</p> <p>なるほど、ただ単に自伝的要素を素材として利用したというだけならば、程度の差こそあれ、あらゆる作家について言えることだろう。だが利用の多寡が問題なのではない。ジッドが固有の地位を主張しうるのは、ある文学的戦略を早くから選択し、以後ゆらぐことなくそれを実践しつづけたからだ。すなわち、自己を禁忌とする逆説的なナルシズムを育み、これに縛られ導かれて、ついには禁忌と執着とが混淆し、現実と虚構とが分別しがたい自伝空間を生きる、そして行為と書物とが捨れあい織りなす「生」の総体そのものをひとつの「作品」として提示する、という戦略である。</p> <p>かくしてジッド作品の主人公たちの多くは彼自身を色濃く投影した存在となるが、しかしまた描き出される「自画像」は不可避免的に誇張と歪みとを内包する。ジッドの総体像に迫るとは必然的に、この誇張と歪みを読み解きながら、彼独自の創造的な自伝空間を検証することにほかならない。作品を単なる現実のモザイクに貶めるのではなく、両者のあいだの微妙な相関を把握するためにこそ実証的な探究は今なおその有効性を失っていないのである。</p> <p>さて本論文は、ジッドの通時的な評伝でもなければ、彼と同時代との関わりを総合的に論じるものでもない。そうではなく、彼が人生の折々に作家や詩人、批評家などと紡いだ様々な人的交流のうち、その重要性にもかかわらず、これまであまり知られていなかったものを中心に、新たな実証的資料を発掘・紹介しながら、ある程度の量の具体的なサンプル、いわば相応数の「切り子面」(ファセット)を提示し、それによってこの「捉えがたきプロテウス」(ジェルメーヌ・ブレ)の可変的な相貌を幾分かなりとも鮮明に照らし出す、というのが本論文の目指すところである。考察の対象となるトピックの大小、残存する関連資料の多寡に応じて章ごとの分量にはかなりの開きがあるが、それら相互の偏り自体が「切り子面」の多様な顔れだとも言えよう。</p> <p>本論文の執筆に当たっては能うかぎり多くの既刊書簡や先行業績を参照するよう努めたが、研究成果としてのオリジナリティを担保するため、特に2種類の資料群を活用した。ひとつはジッドが送受信した書簡のうち未だ活字化されていないものや、『日記』の現行版には未収録の自筆記述などであり、またひとつは彼と同時代の新聞や雑誌</p>	

。 に掲載された書評・小論などである。以下にそれらの資料群について簡略に触れておこう。

まずは何よりも重要な実証の情報源として未刊の書簡群——。筆者が承知するかぎり、送受信の総数はすでに3万通以上、2,300名を超える文通相手が確認されている。ジッドの遺贈分も含め、存在の確認された未刊書簡の多くは現在、パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫に収蔵されているが、作家の唯一の実子、故カトリーヌ・ジッド女史のアルシーヴにも一定数が残されている。筆者は公的機関での閲覧はもとより、いくつかの個人コレクションの調査、過去の競売目録に載った断片的引用の収集にもそれなりの努力を払った。これらの探索・調査をへて、本論文では論述に直接関わる未刊書簡約140通を厳密な考証とともに訳出・提示している。また、いくつかの章の論述においては『日記』の未刊記述を採録・活用している。

もうひとつは、補助的な情報源として同時代の新聞・雑誌に掲載された書評や論文——。ジッドは新作発表時（それはしばしばスキャンダル到来の時でもあった）を中心に、情報収集の専門業者に依頼して、新聞・雑誌に掲載された自身にかんする書評類を長年にわたり収集していた。その結果として総数およそ3,500点の切り抜きが現在、上記のジャック・ドゥーセ文庫に保管されている。同時代の反応・受容を伝えるにとどまらず、ほぼ確実に作家自身が目を通したという意味でも貴重な資料である。じっさい、これら日々消費されながらも、通常はやがて忘れられてゆく情報が、後年の著作や証言では見えてこない事柄の細部を明らかにする例は決して稀ではない。

以上のような基本方針に沿って執筆された本論文の各部の内容を要約すると、まず第Ⅰ部では、若年期における自己の探求と初期の文学活動（1890年代）を論ずる。生まれながらにして二重性を宿命づけられた存在と自らを規定するジッドの姿勢には、後々まで続く実人生と創作との両義的な関係の反映が見てとれる。またこの時期、彼は象徴主義の影響下で文学活動を開始するが、次第に外部世界へと関心のベクトルを切り替えてゆく。

第Ⅱ部では、19世紀末から新世紀にかけての文学活動の広がりや、詩人ポール・フォール主宰の文芸誌『詩と散文』との関わり、重要作品『放蕩息子の帰宅』（1907）の生成と読解、また同著を介してのトルストイへの接近を扱う。特にトルストイとの関わりはこれまで全く知られていなかっただけに、初出時にはフランス本国でも注目を集めた。

第Ⅲ部では、『新フランス評論』誌創刊を契機に作家の知名度が高まり、その文学活動が急速に広がる第一次大戦前後を中心に論ずる。当該期には、文芸批評家との頻繁な交流にくわえ、リルケとの翻訳談義（その内容について本書は実証的考察に基づき従来の通説を覆した）、ジッド自身のタゴール作品翻訳などを通じて外国人作家との交流が活発化する。

第Ⅳ部では、第一次大戦後の外国（特に敗戦国ドイツ）との関係修復をめざす活動の一方でジッドが思想的右派やカトリック陣営の批判を浴びた時期を論ずる。また同時期、彼の関心は青年期に信奉した象徴主義とは対極の「荒々しい現実」（わけても市井の事件や犯罪）の魅力に捉えられてゆくが、その有り様をいくつかの具体的事例を通して考察する。

第Ⅴ部では、晩年の交流に焦点を当て、中国人フランス文学研究者との交流をはじめ、老齢による創作意欲の衰えをカバーした書簡交換を中心に論ずる。また、右翼団体の妨害によって詩人アンリ・ミショーに関する講演が中止となった経緯を、新発見の『日記』断片稿や関連の未刊書簡を紹介・提示しつつ実証的に確定する。

本論文がとりわけ重視した書簡交換による人的交流について、ジッド研究の第一人者クロード・マルタンの次の評言を借りて結語にかえよう——「文通を続けるということは、すなわち一つひとつ別個の道を迎えること、個々の友人とともに、個々の友人のおかげで、ある一つの方向にむかって進むことなのだ。[...] ジッドがよく口にしていたように〈友情を育む〉ことは、〈愛の営み〉と同じく、他者とともに、そして他者のおかげで何かを作り出す行為なのである。それゆえ彼にとって手紙の書き手であることは、小説家であるのと同じくらいに創造的な歩みだったのだ」。本論文が論じた人的交流の多くもまた、畢竟するにマルタンのこの卓見を折々に証する具体的な顕れであり、そのそれぞれが、創作活動・私生活の双方において「捉えがたきプロテウス」の多面性・多様性を反映する「一つの方向」だったのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (吉井 亮雄)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	和 田 章 男
	副 査	大阪大学 教授	山 上 浩 嗣
	副 査	大阪大学 教授	北 村 卓
	副 査	京都大学 准教授	森 本 淳 生
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ジッドとその時代

学位申請者 吉井亮雄

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	和田章男
副査	大阪大学教授	山上浩嗣
副査	大阪大学教授	北村 卓
副査	京都大学准教授	森本淳生

【論文内容の要旨】

本論文は、約 140 通の未刊の書簡および日記や書評等の一次資料の調査・分析に基づき、同時代人との交流を通じて、アンドレ・ジッド（1869－1951）の生涯と文学活動の多彩な側面を実証的に明らかにすることを目的としている。全体は5つの部で構成され、各部はそれぞれ4～5章から成る。初期から晩年へと年代順に配置され、各部の冒頭には当該時期の作家の主要な活動の概観および年譜が記され、各章で論じられるテーマが全体的な展望の中に位置づけられるように工夫されている。補遺としてジッド書誌の状況が概説され、人名、作品名および新聞・雑誌名の索引が付されている。A4判、本文と注を合わせて635頁、索引を加えると計660頁に及ぶ。四百字詰原稿用紙に換算して約1630枚となる。

第一部では初期の文学活動が取り上げられる。自伝『一粒の麦もし死なずば』をめぐって、少年時代の戦略的再構築を分析、またジッドとヴァレリーが同性愛関係にあったと推測する中井久夫の論を実証的観点から批判する。「内的独白」の創始者として知られるエドゥアール・デュジャルダン、「ナチュリズム」運動のリーダーであったサン＝ジョルジュ・ド・ブーエリエとの未刊の往復書簡を分析することにより、共感から軋轢、そして決別へと至る交流関係を明らかにしている。

第二部は『背徳者』（1902）から沈黙期間を経て『狭き門』（1909）に至る重要な時期を扱う。自己をいかに芸術的に表現するかという問題に悩みながらも、作家の交友関係は広がり、文芸誌『詩と散文』の主宰者ポール・フォールとの協力関係、また「デラシネ」という用語をめぐるルイ・ルアールとの論争が分析される。吉井氏は『背徳者』以降の沈滞を破るものとして、『放蕩息子の帰宅』（1907）を重視する。聖書の寓意に基づくこの小品の生成過程、出版経緯、同時代の反応を調査し、聖書との異同に基づく作品解説を丹念に行っている。特にトルストイ邸での同作の朗読およびロシアの大文豪の反応とそれに対するジッドの関心は、ドストエフスキーの影響を強く受けていたジッドの知られざる側面を証するものである。さらには、戯曲『カンダウレス王』のドイツ講演をめぐって、関連書簡の年代設定を修正することにより上演された劇場を明らかにした。

第一次世界大戦前後に焦点を当てた第三部では、二人の批評家と二人の外国人作家との交流が問題となる。既に文壇での地位を確立していたジッドに関する論考を書いた批評家アルベール・チボーデと、今ではあまり知ら

れていないガストン・ソーヴボワとの友好な交流の経緯を明らかにする。リルケによる『放蕩息子の帰宅』ドイツ語訳をめぐって、翻訳者が底本としたのは通説とは異なり、「豪華本」であることを証明する。また、インドの詩人タゴールの『ギターンジャリ』を翻訳刊行するにあたり、部分訳を雑誌掲載したダヴレーの誤訳を指摘するなど作家としての良心と誠実さを示したことが論じられる。

第四部では、同性愛擁護やカトリック教会への揶揄などによって、文壇のみならず社会的に知られた存在となったジッドの多彩な活動が対象となる。「ポンティニー旬日懇話会」の活動、蔵書の競売、不法監禁事件のような三面記事的事件への関心など、広く「現実」へまなざしを向けると同時に、アンリ・マシスのようなジッド批判を展開する論者に対しても根気よく論争を続ける。

世界的な名声を博すようになった晩年を対象とする第五部では、アンリ・ミショーについてのニュースでの講演が中止に至った経緯を明らかにするとともに、ジッドに心服する中国人研究者や若手ジャーナリストなどの無名の青年たちとの交流に見られる老作家の真摯な態度に光を当てる。

終章では、日記に見られる「独白型作家」と対照しつつ、書簡には文通相手によって変化するプロテウスのな「対話型作家」の相貌が観察されることにより、書簡が小説の「実験室」としての機能を果たしていると結論する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、未刊の書簡、日記、新聞・雑誌の書評等の一次資料の調査・分析に基づき、アンドレ・ジッドの生涯と作家活動の多様な側面を実証的かつ説得的に明らかにしている。パリ・ソルボンヌ大学付属ジャック・ドゥーセ文庫所蔵および個人蔵の約140通に及ぶ未刊書簡を発掘し公開した意義は大きい。初期から晩年に至るまで5つの時期に分類し、自己探求、他者との交流と論争、外国への関心の広がり、現実への関心など各時期によって変化する多彩な作家の相貌を、同時代の作家・批評家・ジャーナリストなどとの交流を通じて論じている。ジッドが書いた書簡のみでなく、文通相手の書簡にも同等の価値を認め、「対話」の持つ双方向性と可変性の中に作家の相対的世界観と、「プロテウスの」とも称されるほどに絶えず変貌するジッド像を浮き彫りにしている。

本論文の第一の意義と価値は、未刊書簡等の一次資料の実証的考証にある。特に年代設定や発送場所の特定などは精緻な論証に基づく説得的な議論を展開している。通説となっていた年代設定を修正することにより、事実関係の修正・明確化に寄与している。たとえば書簡の年代設定において2年もの修正を施すことによって、ジッドの戯曲が上演されたベルリンの劇場を「新劇場」ではなく「小劇場」であることを実証するなど、安易な憶測を避け、一次資料の綿密かつ正確な分析に基づく成果を挙げている。翻訳や朗読会を通じて、トルストイ、リルケ、タゴールなどの外国人作家たちとの交流あるいは接点を明瞭にし、ほとんど歴史に名を留めていない内外の青年たちとの文通や交際もまた、ジッドの作家像・人物像の多様性を知る上で貴重な材料を提供している。

「生と作品は分かちがたい」と言うジッドにおいて、創作と人生は密接に関係している。そのためとりわけ日記作家としての側面が重視されてきたが、本論文においては、独白を中心とする求心的な日記執筆とは対照的あるいは平行的に、2300人を超える文通相手と書簡を交わしてきた書簡作家としての遠心的な活動に焦点が当てられる。称賛と共感の書簡以上に、相対立する論争的性格の書簡が重視され、異なるものへの接近という動きの中にこそ、作家としてのジッドの対話的かつ可変的特徴を見出している。本論文は、吉井氏の長年にわたるジッド研究の成果をまとめたものであるため、章によって性格が異なるところも見られるが、その綿密な実証的論証と、知られざるジッドの多彩な側面を発掘した意義は大きい。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。